

《書評》

『「子どもの論理」に培う小学校国語教育の実践研究』

春木憂*著、風間書房、2024年

山元隆春†

2018年に広島大学で受理された春木憂氏の学位請求論文を書籍化した本書の大切な研究上のモチーフは、たとえば次のように記されている。

本研究では、自分あるいは他者の言動から「子どもの論理」を読みとることができ、そのうえでラショナルに修正していくことのできる力をつけるための実践を試みたいと考えている。その点から、心内語は示されず言動が示されているものから「子どもの論理」を読みとる過程が必要である。これは、国語科における文学的文章の読解学習で「登場人物の心情」を読みとる過程と重ねることができる。本文に示される登場人物の言動から、示されていない心情を推論するのである。(83頁)

「自分あるいは他者の言動から『子どもの論理』を読みとることができ、そのうえでラショナルに修正していくことのできる力をつける」実践をつくるために、筆者の春木憂氏はアルバート・エリスによるREBT (Rational Emotive Behavior Therapy) を深く理解した。「言動」から「子どもの論理」を「読みとり」、「ラショナルに修正していくこと」が教育活動の柱であると考えた。だからこそ、「推論する(推測する)」「読み取る過程」が重要だとしている。「推論する(推測する)」ということは、他者と世界を「わかる」ための重要な方法の一つであり、それを基盤にすることが「子どもの論理」を捉え、寄り添いながらその育ちを見届ける営みにとって不可欠なことだと本書は教える。

「わかる」ことは、その対象に寄り添いながらも一定の距離をとって対象を見つめる必要のある行為である。相手が何かを発言したとしても、その発話内容そのものがすべてではない。話されたことの意味は捉えることができたとしても、その言葉がどのような含意をもっているのかということを考えなければ、その言葉をその人が自分に示してくれた真意を探ることにはならない。これは、言葉によるコミュニケーションにおいて何よりも重要なことである。

冒頭で述べたように、春木氏は国語教育実践にとって何よりも大切なこの点を掘り下げることのできる「実践理論」を組み立てようとした。本書においてそれが一貫していることに心打たれる。

* 立命館大学産業社会学部准教授

† 広島大学大学院人間社会科学部研究科教授
tyamamo@hiroshima-u.ac.jp

相手を「わかる」ことは、その人の言動の奥底にある真意を探ることに他ならない。話を理解しようとするときに、その話から情報を取り出したり、話の概要を捉えたりするだけで、理解したとは言わない。文章を理解することは、情報を取り出したり、ストーリーを要約したりすることに留まらない何かである。書き手が残した痕跡から、その書き手の「論理」を捉えなければ深い理解には至らない。

だから春木氏は文学作品を読む場合に「登場人物の言動の中に潜むビリーフに気づくことは大切」と言う。「言動」の奥底にあるものに「気づく」ことができれば、その作品の登場人物の理解は深まる。そして、そのような言動をするような人物を造型した者の「ビリーフ」を検討することにつながる。

本書第3章では、「予備調査」から浮かび上がった「『子どもの論理』の実態」が次のように集約されている。

- ・児童の中には、複数のビリーフが存在する。
- ・一つの出来事に対して、複数のビリーフがかかわる場合がある。
- ・複数のビリーフは、複雑かつ重層的な関係性をもつ。
- ・「子どもの論理」を理解するためには、多面的に観察し、総合的に考察する必要がある。

(139頁)

「子ども」を理解するために、子どもの言動を克明に分析した成果である。その根底にあるのは、存在は外見だけがすべてではないが、その外見の特徴を捉えて、浮かび上がった諸点を関連づけ、解釈することでしか、その存在を理解することはできないのだという信念であると思われる。「『子どもの論理』の実態」として掲げられているこれらの見解は、さまざまな対象の「理解」に応用可能である。まず、そのことを一貫して探究したところに、本書の大きな特徴があり、意義があると思う。それは、本書の著者が相手や対象をそうあらしめている要素を見極めようとするためでもある。だからこそ、その考察は深い。

以下、これ以外の本書の重要な特徴を言葉にしてみよう。

私たちは読むことの授業を通して、子どもとどのようにかわりながら、何を学ばせるのか。これは国語科の読むことの学習指導における根源的な問いである。本書は、「子どもの論理」に目を向けてこの問いに応えようとする。

読むことの学習指導についての考え方には、文章の趣旨や主題を捉えることが大事だとする考え方もある。また、表現の特徴を捉えていくことが重要だとする考え方もある。テキストベースの考え方に立つと、そういうことを読むことの学習の目標にすることになるだろう。そうした考え方で学習指導の課題を乗り越えようとして、各々の感想を交流させて自らの感想と他の人の感想の共通点と差違を確認しながら、修正しながら意味を掘り下げていくプロセスに目を向けることが重要だとする考え方が提出された。本書にはこの方向での議論が展開されている。

春木氏は、子どもと対話する過程で「子どもの論理」を捉えることを、読むことの授業においても中心にしようとする。それは、読者としての子どもの「理解」を中心にすえる考え方であり、一人ひとりの読みと解釈をいかしていこうとする考え方である。しかしそれは子どもに任せればそれでよいという主張ではない。

ピーター・レイノルズに『てん』という絵本がある（谷川俊太郎訳、あすなろ書房、2004年）。図画工作の時間に絵を描くのが苦手なワシテという女の子が、絵が描けない悔しさに画用紙に力を込めて打刻した「点」を先生に絵として認められ、その後「点」の芸術を極めるという話である。ワシテの「点」の価値を認めてくれた先生のように、春木氏は子どもの言葉の奥にある「子どもの論理」を捉え、解釈して、それをフィードバックし、子どもと相談しながら、ラショナルに修正していこうとする。その過程で、教師と子どもとの対話が為されることが大きい。レイノルズの『てん』の先生は、ワシテの描いた点を、ただの点とはみなさなかった。ワシテが渾身の力を込めて打った点に、絵を描くことができないことにワシテが感じていた悲しみや憤りや歎きが込められていることを読み取った。本書の考え方を踏まえて『てん』のこの出来事を解釈してみると、ワシテの先生がワシテの点を見てさらにもう一枚白紙の画用紙を与えて「描いてみて」と言った言葉は、表現の奥底の「子どもの論理」を感じ取り信じたからこそ発されたものであり、その後のワシテを勇気づけるものになり得たのだと考えられる。

春木氏は「文章を理解できるようになるためには、『子どもの論理』をいかした教育実践が必要である」とし、そのように考える根拠の一つとして、本書170頁に次のような東井義雄氏（兵庫県で生活綴り方を進めた教育者で『村を育てる学力』の著者・浄土真宗僧侶）の言葉を引用している。

「手がつけようがない」というのは、結局、ああいう子どもの論理だとか、生活の論理だとか、普通よりはちょっと変わった構造を持っているので、世間に流通する論理があてはまらない、ということではないだろうか。従って、ああいう子どもの生活の論理の構造さえ解明できれば「手をつけようのある子ども」になってくるのではないだろうか。〔『東井義雄著作集 1』明治図書〕

こうしたことが可能になる方法の一つとして本書ではREBT（Rational Emotive Behavior Therapy）の枠組みが用いられているのであるが、春木氏の実践の根底にあるのは東井氏の言う「ああいう子どもの生活の論理の構造さえ解明できれば『手をつけようのある子ども』になってくるのではないだろうか」という思いであり、子どもへの信頼である。そのことが本書では具体的にわかりやすい文体によって読者であるわたくしたちに伝わってくる。

東井氏は子どもの拙い表現のなかに、その子の心の動きを読み取ることがきわめて重要であることを、印象的な表現で述べているのだが、春木氏の子どもへの対し方にもそれはつながっている。

本書に示されているのは、未来を生きていく子どもにとって何よりの励ましであり、自分がいまやったことが認められ、これから何を見つめ、どのように行動していけばいいのかということ、やさしく導く国語教育実践に向かう取り組みでもある。そのようなことを子どもにフィードバックするための条件を、春木氏は実証的に探った。おそらく自身の教育実践のなかで得た確信を証明するような試みであった。教育実践研究のきわめて重要な方向性を示したと言える。

国語教育実践をどのようなかたちで捉えれば、アカデミックな検討に耐えるものになり得るのか、ということを探った研究でもある。どのようなかたちをとれば、実践報告ではなく、実践研究と言えるものになるのか。一つの実践事例ではなく、多くの教師が繰り返し子どもの心に届く実践の原理をどのようにすれば記述できるのか。そのような問いを試行錯誤しながら探っていく成果である。

なお、タイトルに用いられている「〇〇に培う」という言葉は、「〇〇を育てる」という言葉に近い意味をもつ言葉であるが、対象語「〇〇」の近くでその対象自体の育ちに寄り添うというニュアンスの伴う表現である。先ほど触れたように本書では東井義雄氏の言葉が複数引かれている。周知のとおり、その東井氏が著した教職員の指導記録のタイトルは『培其根』（其の根に培う）である。本書のタイトルの「培」の対象語は「子どもの論理」であるが、東井氏の教育実践と著作に対する並々ならぬ敬意を感じ取るのはわたくしの考えすぎであろうか。博士課程1年次の最初の演習で東井義雄著『村を育てる学力』の分析・考察を担当した評者にとって、本書を読むことは子どもへの向き合い方においてこの名著と共通した意思を感じ取らざるをえない営みであった。